

資料紹介

江戸川乱歩のもうひとつの探偵

——大正十四年の探偵小説草稿

落合 教幸

この草稿は、乱歩が初期資料を保存していた大型の封筒のひとつ、「EXTRAORDINARY」と題されたものに入っていた。「D坂の殺人事件」や「人間椅子」といった初期の草稿などが同じ封筒に入っている。

封筒には内容物のタイトルが列記してある。この草稿に対応するものは裏面にあり「大正十四年 無題 探偵小説発端草稿(馬蹄鉄のトリック)」となっている。

冒頭は欠けているので、途中からの文章になるが、最初に近い部分であることは内容からわかる。

旅行者である語り手の「私」と、その友人である橘が、ある村で死体の発見現場に居合わせる。若い男が馬に蹴られ、転落死したようであった。馬は近くに住む老人の家から逃げ出していた。死体は新婚の夫だったが、その妻と結婚を望んでいた男は他にもいた。

素直に見れば、この妻のいところであの村の書記が最も怪しい。乱歩は別の

犯人を考えていたのか、残念ながらこの草稿からは読み取ることができない。封筒にある「馬蹄鉄のトリック」とはいかなるものであったかも不明である。

探偵役は「橘」であろう。「私」と橘は写真撮影をするための旅行をしてきたとある。偶然遭遇した事件に橘は興味を持つ。原稿はそこで途絶えていて、捜査や解決へは踏み出していない。

探偵「橘」は、乱歩の別の小説「火縄銃」にも登場する。「火縄銃」は、乱歩の最初の全集である、平凡社の江戸川乱歩全集に収められた作品で、乱歩の学生時代の習作を書き直したものである。その序文で「橘梧郎」として紹介される。「橘は高等学校の学生で、探偵小説や犯罪学の心酔者で、シャーロック・ホームズというあだなをつけられていた様変わり者です。「私」という人物は橘の同級生で、ワトソンの役割を勤めている訳です。」

「火縄銃」は、二人が訪れたホテルで

密室殺人が起こり、それを橘が解決するという話である。M・D・ポーストやモーリス・ルブランの作品にも登場するトリックだが、乱歩が習作を書いた大正四年か五年の段階では、まだそれらは発表されてはいなかったということも乱歩は書いている。

今回紹介する草稿の右側余白に「大正十四年」との書き込みがある。大正十四年は、前年に執筆した「D坂の殺人事件」が掲載され、「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」といった

探偵小説 大正十四年

今の先、新左エ門とこの息子がみつけ出して知らせた計りよ。まだ死骸もそのま、だ。僕はこれから町へ行って署の方へ報告して来なければならん「のだ。」

多弁な巡査は、婆さんの差出す御茶を呑んで、忙しい中を、詳しい事まで説明する。

「それが馬にけられたらしいんだよ。婆さん。一昨日の雨からこつち、一人も人通りがなかったと見えて、崖の上

作品が次々と発表されていく年であった。そういった作品のひとつとして、書かれようとしていた作品だろう。

乱歩の生み出した名探偵、明智小五郎は「D坂の殺人事件」で初めて登場する。今回掲載したこの草稿が完成していれば、「橘梧郎」が、明智の代わり、あるいは、明智とは別の名探偵として、活躍していくという可能性もあったかもしれない。

落合教幸(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員)

は松さんの下駄のあとがある計りで。その外には人の来た様子がないんだ。人の足跡はないが、馬の蹄の跡があり

く残ってゐる。あれを見るとどうも、松さんは馬にけられたのか、さもないや、馬に驚いて落ちたんだね。」

云ふ丈けのことを云ふと、巡査はためてゐる婆さんを残してサツサ行つて了つた。私と橘とは顔を見合せた。事あれかしと待ち構えてゐた私達である。相談するまでもない、二人は御互

の眼色から察し合つて、婆さんにその新左工門の崖とやらへの道を聞くと、ちき近所だといふので、早速行つて見ることにした。

「君、ドイルのシルヴァ、ブレエズといふ小説を知つてゐるか。「馬にけられたなんて云ふと」俺は今の話を聞くと直ぐあいつを思ひ出したんだが、始めから馬にけられたと分つてみちや面白くないね。」

橘は十八番を出して、何かといふと直ぐ探偵談に結びつけたが。

「さう不可解な事件が、轉つてゐるものか。」

と私は彼の好奇心を笑つたことだが、あに計らんや、それが矢張り橘の手腕を煩さなければならぬ不思議の事件だったのである。

問題の崖へ行つて見ると、もう黒山の人ばかりである。けれども幸なことには、皆崖の下の死人の方へ「行つて」集つてゐるので、崖の上の足跡はあらされて居ない。二三人足跡については居るが、松さんの足跡らしいのと馬蹄の跡とからは離れてゐるので、まぎれる様なことはない。

橘は犬の様に四つん這いにならぬばかりにして、その二つの足跡を仔細に検査して居たが、やがて、何か疑はし

い所でもあるのか、眉を擧げて私の方へやつて来た。

「オイ、こいつは一寸面白いことになり相だぜ。何しろ下へおりて見やうじやないか。」

かう云つて、私の肩を掴むと引づる様にして、半町計り後戻りして、緩かな坂道を下つた。其所には二十人計りの村人が、ガヤ／＼云ひながら死骸を取まいてゐる。死骸には一枚の■が着せてあつたが、そのをまくつて一人の女が取り縋つて泣いてゐる。取乱した様をしてゐるが、村の女房にしては垢抜けのした美人である。まだ若い身空で後家にならねばならぬのかと思ふと、同情を禁じ得ない。村人達も口々に、死人のことよりは哀れな女房の噂をしてゐるらしい。

「何てまあ気の毒なことだんべ、松あんも馬にけられておつ死ぬなんて、因果なこつたのう。」

「松あんも好人だつたが惨いもんだ。それに、後に残つたお藤さあが可哀相だよ。」

「さうよのう、好き合つて一緒になつた仲だに、先月婚禮ぶつた計りでこの仕宜じや、お藤さあの泣くなあ、無理でねえだよ。」

「だが、一体松あんをけつた馬はど

この馬だんべ。」

この時しきりにお藤といふ女房を慰めてゐた一人の老人が振返つた。

「いや、そりよ云はれると、穴でもあらば突這入り度い様だが、俺の「熊」奴が昨晚又既を抜け出して突走りやがつての、今朝見ると裏の木戸が開いてるじやねえか。昨晚ちやんと締りを置いて置いたに變なこんだと思つた、が、熊の奴木戸をこじ開けて、も出たと見えて、裏の畑の草あ一生懸命食つてやがるだ。マア、何とも申訳ねえこんだが、どうも松あんをこの崖から落したのは俺がの馬に違ひねえだよ。」

そこへ、町から医者をつれて来た先刻の巡査が帰つて来たので、村人達はパツパツ静まった。医者は一應形式的に死人を診たが、致命傷は落ちた時下にあつた石で後頭部を打つたのだと判明した位で別に変つた事もない。医者が退くと、今巡査の後から来たらしい、村役場の書記とでも云ひ相な三十格好の男が、ツカ／＼と出て来て、まだ泣いてゐるお藤に、

「ヤア、お藤さん飛んだことだつたねえ。然し泣いて居たつて仕方がない。早く死骸を片づけ様じやないか。だが人の運といふものは分らんものだねえ。昨夜、僕を送つてそこまで一緒に

来て呉れたつが、それが今朝はもう死人になつてゐるんだからなあ。」

「ハイ、昨夜あなたを送つて出たつ切り帰りませんで、お宅へでも泊つたんじゃないかと思つて、まさかこんなことに成らうとは知らないもんですから、そのまゝ寝て了つたら、私はどうしたい、んでしやう。」お藤は涙まじりにかき口説く。

「さうさ。今朝起き抜けに、お前が私の所へ来て、松さんが居ないといふので、私も驚いたが、まさかこんなこと、は思はなかつたよ。だがこれも運命だよ。あきらめる外はない。聞けば新左工門とこの馬が松さんを落したのだと云ふが、どうもあの馬はたちがよくないぜ。お前、あの馬はどうかしなければいけないな。この前も夜半に飛び出して、さんざ他人の畑を荒したといふじやないか。」

独りで心得顔に喋つてゐる。村人達の蔭口を綜合すると、この男は矢張り役場の書記を務めて居るので、死んだ松さんといふのは従兄弟の間柄らしい。何んだか村人間の評判は余り香しくない様である。見た眼にも人好きのする方ではない。袴を穿いて深ゴムの靴をギウ／＼鳴らして居る所などは学問を鼻に掛けて百姓達をいぢめる田舎

官吏によくある型だ。私はどう云ふ訳かこの男が可憐なお藤さんにツケく物を云ふのが憎くて耐らなかつた。

やがて、死人は村人の手によつてお藤さんの家へ運ばれる、新左工門といふ老人は、既の締りについて巡査から説諭を受ける。さうしてこの事件はあつてなく落着して了つた。一人去り二人去り村人が皆去つて了ふと、後には橘と私と二人丈が取残された。

「よくある、村の悲劇とでも云つた場面だね。」

私は少々感傷的に橘の同意を求めると彼は何か馬鹿に考へ込んでゐる様であつたが、

「外見上はさうの様だが、俺は寧ろ滅多にあるまじき場面だと云ひ度いね。」

「それや、全体どういふ訳だい。」

「兎に角、これは犯罪なんだ。一寸珍しい犯罪だぜ。昨夜さまよひ出た馬といふのを一度見て見やうじやないか。」
私はヤレ／＼こいつはたまらぬと思つた。今日も亦橘探偵長殿の好奇心の爲に、折角の寫眞旅行を半日フイにするのか、これだから先生と一緒に来るのは厭やだよ。

馬の持主新左工門氏の家は直ぐ崖の上にある。我々はその厩に案内して貫つて新左工門老人の説明を聞くことに

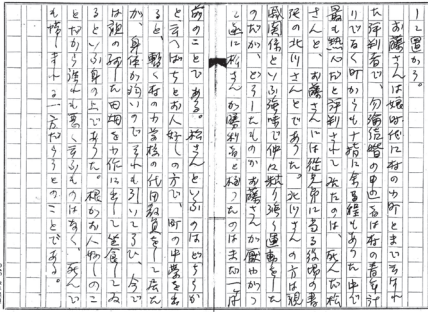
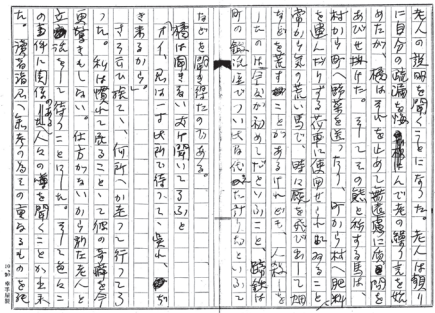
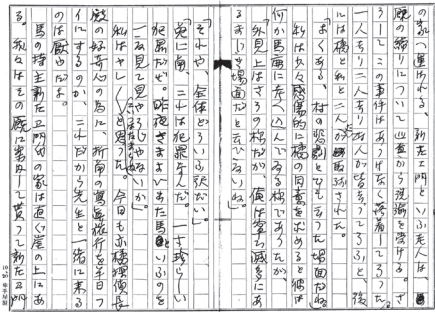
なつた。老人は頻りに自分の疏漏を悔んで老の繰り言を始めたが、橘はそれを止めて無遠慮に質問をあげ掛けた。そしてその熊と称する馬は、村から町へ野菜を送つたり、町から村へ肥料を運んだりする荷車に使用せられてゐること、常から気の荒い馬で、時々厩を飛び出して畑などを荒すことがあるけれども、人殺しをしたのは今度が初めてだといふこと、蹄鉄は町の鍛冶屋でつい此間代えた計りだといふことなどを聞き得たのである。

橘は聞き度い丈け聞いて了ふと「オイ、君は一寸此所で待つて、呉れ、ちぎ来るから。」

さう云ひ捨て、何所へか走つて行つて了つた。私は慣れて居ること、彼の奇癖を今更驚きもしない。仕方がないから新左老人と立話をして待つことにした。そして色々この事件に関係のある人々の噂を聞くことが出来た。読者諸君へ参考の爲その重なるものを記して置かう。

お藤さんは娘時代に村の小町とまで云はれた評判者で、勿論結婚の申込者は村の青年計りでなく町からも十指に余る程もあつた中で最も熱心だと評判されて居たのは、死んだ松さんと、お藤さんには従兄弟に当る役場の書記の

北川さんとであつた。北川さんの方は親戚関係といふ強味で仲々粘り強く運動をしたのだが、どうしたものかお藤さんが厭やがつて遂に松さんが勝利者と極つたのはまだ一ヶ月前のことである。松さんといふのはどちらかと云へばちとお人好しの方で、町の中学を出ると、暫く村の小学校の代用教員をして居たが、身体が弱いのでそれも引いて了ひ、今では親の残した田畑を小作に出して坐食してゐるといふ身の上であつた。根がお人好しのことだから誰れも悪く云ふものはなく、死んでも惜しまれる一方だらうとのことである。



編集後記

二〇一五年度には「戦後池袋」の企画があり、昨年度の『センター通信』でもご報告しました。戦後の池袋に関連する研究報告等については『大衆文化』の第十三号、十四号、十五号に掲載しています。また、ひつじ書房から『ヤミ市文化論』が刊行されます。シンポジウムの内容や、展示で取り上げられたテーマについての研究論文を収めた書籍です。

昨年度に引き続き、二〇一六年度も多くの展覧会に協力いたしました。簡単にまとめたものを掲載いたしました。詳細は『センター』刊行の『大衆文化』第十六号に、それぞれの企画の担当者の方にご寄稿いただいています。

江戸川乱歩賞、第三回（一九五七年）の受賞者である、仁木悦子氏の資料をご寄贈いただきました。『大衆文化』でその書籍を紹介しています。

小学館で刊行されている電子版江戸川乱歩全集に協力しています。附録にある乱歩著書の画像は乱歩邸の蔵書を撮影したものです。その他にも多くの資料を収録し、電子書籍であることを活かした全集となっております。

います。

立教大学に寄託されている乱歩資料の『奇譚』が、藍峯舎より刊行されました。乱歩が若き日に作成した手製本で、探偵小説の概観が書かれています。中相作氏による翻刻に画像を収録したCDがついています。

毎年開催している乱歩記念講演会、二〇一六年三月二十九日には荒俣宏先生に「乱歩と怪奇小説 名称の成立と変遷過程について」と題してご講演いただきました。今年度は浅羽通明先生に「乱歩・読書・「おたく」〜われらはみな幻影の城主〜」という講演をしていただく予定になっています（二〇一七年三月十一日）。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信 第十一号

二〇一七年三月二十五日 発行

編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念

大衆文化研究センター

〒一七一八五〇一

東京都豊島区西池袋三―三四―一

電話番号 〇三―三九八五―四六四一

(FAX兼)

rampo@rikyo.ac.jp

公開日 水曜・金曜（祝日は除く）

（十時三十分〜十六時）